

---

# こわいはなし

宵山 芭子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こわいはなし

### 【Nコード】

N0417F

### 【作者名】

宵山 芭子

### 【あらすじ】

短編創作恐怖譚となっております。章ごとに話は完結しておりますので、何処から読むも構いません。

## かみ

深夜一時。やっと仕事が終わりに帰宅することができた。あまりの疲労に、食事も摂らずに電気を消しベッドの上に横たわる。

一人暮らしの部屋はやけに狭く感じ、しかし仰向けになり見つめる天井は広く感じる。

自分以外誰も寝ない布団は、主を冷たく迎え入れた。

ごろん、と壁側に寝返りを打つ。すると、消したはずの明かりがついた。

スイッチの接触が悪かったのだろうか。物憂げにゆっくりと起き上がり、ベッドから降りる。

ふと床を見ると、さっきまでは無かった違和感を覚えた。

床には、人間の長い毛髪が一人分散らばっていた。

呆然と立ち尽くしていると、ブツンという音と共に電気は消え、部屋は闇に包まれた。

## かみ（後書き）

あとがき。

読んでくださってありがとうございます。

初めて書いたホラーです。

淡々と書くのが好きです。

でもそれだと字数が足りなくなってしまう、これ以上書いたら蛇足になるなあ…でも足りないから投稿できないなあ…と悩みました。

この後もこんな感じの話が続きます。

怖い話に季節など関係ありません。

春夏秋冬、眠れぬ夜の供などにどうぞご利用下さいませ。

いたくないよ

先日購入した文庫本に、ケースが付いていた。

特に目を引くデザインでもないが、妙に古ぼけた感じが手になじみ気に入っている。

ベッドの上にケースを放り投げ、勢いよく私自身もベッドに寝転んだ。

明日は休みである。少しくらい就寝時刻を遅めても差支えはないのだ。

そう思うと、私は読書の際の独特な高揚感で胸がいっぱいになった。

3時間は経過しただろうか、私は本に没頭していた。

仰向けになったり体を横にしたりと体勢を変えながら、それでも一心に文字を追う。

物語の場面は、起承転結の転から結に向かうところであつた。

そのとき、体勢が苦しくなってきたのか、横向きに寝ていたベッドの上の私の肩からこり、と軟骨が擦れる音がした。

何気なく寝がえりをうつと、しんと静まり返った深夜の自室にぱんつと間の抜けた音が響く。

音の方向からして、多分ベッドに無造作に放り投げた本のケースだろう。

興を殺がれた重い体を少しだけ起こし、眼は本に向けたまま床に手を伸ばした。

しかし、掴めない。

まるで霞のように掴めなかった。

そこがさがさと左手で床のあたりをまさぐると、不意に人の指の感触。

つるりとした硬質の、爪のような部分に触れたのだ。それは、妙に温もりを持っていた。

一瞬にして悪寒が背中を駆け抜け、私はとっさに左手を振り払った。

まさか、ベッドの下に人間が居るとでもいうのだろうか。もしか、スニーカー？

馬鹿な。ベッド下には人が入れるスペースなど……

何かと勘違いしているのだろう。

そう思いながらも心臓はバクバクと跳ねる。

恐る恐る床を見ると、やはりそこには人の指があった。

しかし、私が驚愕したのはそれだけでは無い。

指は、本のケースから飛び出していたのだ。

「ひつつつ……！」

悲鳴と息を飲んで両手を背中後ろにつこうとしたが、バランスを崩してがくと倒れてしまった。

左手を見ると、ケースから出ている分だけ指は無くなっていた。

不思議と痛さは、無い。

いたくないよ（後書き）

友人S氏との日常会話から生まれた話です。

「ブックケースから指が出ていたら面白いよね」

とはS氏の話です。

S氏の感性に吃驚しまして、

「そのネタ貰った!」

と叫んでしまいました。

S氏は快く了承して下さいました。ありがとうございます。

## むし（前書き）

### ご注意

このお話は多少気持ち悪い描写がありますので、ご飯の時には読まない方がよろしいかと思えます。

ご飯のときには携帯電話やパソコンを閉じて下さいね。

そしてきちんと噛んで食べて下さいね。

健康第一です。

むし

ふと気がつくと、右の手首に丸い傷が付いていた。

生々しい傷であった。

皮が直径1センチ程度剥がれていて、中の肉がよく見え血が滲んでいた。

血が乾いていないような新しい傷であったが、どこで傷が付いたのか分らず痛みもなかった。

訝しんで傷口をよく見ると、奇妙な物体を発見した。

傷の真ん中に、血塗れになりながら動く、細長く白いもの。

「虫……………」

虫だった。3センチほどの、細くぶよぶよした虫が、ぐね、ぐね、と蠢いている。

全身が寒くなり、鳥肌が立った。

あろうことが、虫は傷口から 顔を出していた のだ。

私は、右肘の裏側から傷口に向かって、マッサージするように左手の親指と人差し指の間を使い虫を押し出した。虫に触る勇氣を持ち合わせていなかったのだ。

皮膚の下で虫がぐねぐねと動いている。そんなに外の空気は厭か。しかし私はそんな虫を、ただただ気持ち悪く憎々しいと思うばかりである。

傷口がめりめりと音を立て、虫が最後の抵抗をする。黙れ。さっさと私の身体から出てゆけ。

ぶちっという音と共に、虫はぞろりと身体から出ていった。

畳の上に転がる、私の血と己の透明な体液にまみれ、てらてらと濡れ光っている虫はぴくりとも動かずに横たわっている。その姿は、柔らかな徳利の形をした飴を伸ばしたような、腹と思われる部分のみ丸く膨らんだ細長い虫だった。

あまりの体験に、私の足は力を失って畳の上に尻を落とした。

私は何を産んだ。いや、そもそも「産んだ」のか。

これは現実なのだろうか。現実こんな虫など存在するのだろうか。これは夢か。夢であって欲しい。

噫、畳のい草の匂いが生々しい。仄かな腐臭は虫のものだろうか。これは確かに現実なのかもしれない。

気持ちが悪い。吐きそうだ。吐いたら片付けなくては。そうかトイレに行けば良いのか。

立ち上がれるか。立ち上がろう。立ち上がらなくては…。

足に力を込めようとした時のことであった。

遠くの方から、電子音が聞こえた。チャイムの音だ。

私は現実の、日常の世界に戻りたかった。この奇怪な生き物との遭遇をすべて夢として、人と会うことで私が本当の現実の世界にいる住人であることを確認したかった。

私は再度足に力を入れて、立ち上がり、よろめきながら歩いた。

震える右手でドアを開けると、そこには見知らぬ人が立っていた。

「すみません、アンケートのご協力をお願いします」

眼前の女性はそう言って紙を差し出してきた。

「あ、ええ。すみません今はちょっと…」

そう言いながらも私は少なからず安心した。

私は人と会話している。大丈夫だ。私は人と会話できているのだ。私の控えめな拒否を無視し、彼女は口を開く。

「ムシは、産まれましたか」

……………ムシ。虫。

何の虫か。

「まだ、産まれていませんか？」

困ったような表情で彼女は私を見る。

「む、虫…ですか。」

複雑な表情のまま、答える。するとその女性はいきなり言う。

「ああ、産まれていますねえ、ムシ。ほら右手首に傷。」

何の話だ。

あれは夢だ。私の夢であるのに。貴方は私に現実を届けにきてくれたのではなかったのか。あの虫は夢の世界が産みだした者であるはずなのに。

「あのムシ、潰しては駄目ですよ。卵が体内に入ってしまいます。そうしたらまた増えますからね、ムシ」

「卵…ですか。」

増える。ムシ。ふえる。ふえる。虫……………。

ぶち

先ほど聞いた、あの音は何だったか。面皔を潰した時のような気持ちの悪い、あの音は…。

「ああ、潰しちゃったんですね。もう少し早く来ればご忠告できましたが…」

私の頭の中を見透かしたように言葉を発したその女の視線の先には、私の足があった。

そつえば足が痒い。足。特に脹ら脛が痒い。

意識をすればするほど痒みは数段増し、思わず手を脹ら脛に伸ばした。

ぞろり

何かが動いた。私の皮膚の下で。

ぞろり。ぞろり。

反射的に足に視線を移した。見ると、脹ら脛の皮膚の下が、うね、うね、と蠢いていた。

ぼこぼこ、私の皮膚の下を這いずり廻る何か。この上ない胸のむかつきと吐き気とが一気にこみ上げてくる。「何か」の正体は分かっていた。

痒かった。今は脹ら脛だけではない。首が、腕が、腹が、とにかく全身を猛烈な痒みが襲ってきた。

とうとう我慢が出来なくなり、身体を掻く。爪を立てた場所からぶちぶちと音が聞こえてきた。

かまうものか。どうせ夢だ。人の夢に巣くう虫など皆死んでしまえば良いのだ。

「ああ潰したら…」

あの女性の声も遠ざかる。どうだっていい。あれも私を現実に戻しに来たわけではないだろう。

私はひたすらに身体を掻きまわった。なぜだか、身体が軽くなってゆく。

死んでゆく「何か」のぶちぶちという音を聞きながら、私の意識はだんだんと薄れていった。

そうかこれは夢だから。夢だから、そうだ今から夢が醒めるのだ。

温かいベッドの上で、朝の光を浴びてまた眠ろう。今度はもっと幸せな夢を見たい。

これで、やっと、悪夢から解放される……………。

\*\*\*\*\*

「ああもう、人の話を聞かないから……」

そう言って、女は掻き篸り過ぎて檻褸布（けりぬめ）のようになった男の身体からぴちぴちと出てくる虫を眺めていた。

男は、玄関で倒れたまま動かない。

「これでは、アンケートをしてもらっ暇もなかったわ。また次の人を探さなきゃ」

そう言って、玄関のドアを閉めた女は隣の家へ向かって歩き始め

た。

「すみません、アンケートにご協力をお願いします。  
.....ムシ、産まれていますか？」  
.....

## むし（後書き）

悪夢です。

いえ、僕が実際に見た悪夢だという話です。それだけです。

本当に体から虫が飛び出てきたら厭ですね。

寄生虫なら大人しく寄生してくればいいのにと 생각합니다。

宿主を死なせたら元も子もないのに。

うらんでおります

山里望は、そのとき湯船に浸かっていたという。

夜9時ほどの時間帯であったが、雪のためだろうか時たま聞こえる水の滴りのほか、外の音は全く聞こえず風呂場はしんと静まっていた。

湯船に浸かり一日の疲れを癒し、温かい湯の中で昼間に酷使し強ばった筋肉を揉みほぐす。肩まで浸かり、ほうと息をついた時だった。

”ピンポン”

玄関のチャイムが鳴った。

一人暮らし、自分のほかに玄関を開ける者はいない。彼は湯冷めするのを厭い、居留守を使おうと思ったそうだ。

”ピンポン、ピンポンピンポン”

しばらくすると、またチャイムが鳴った。

…しつこいな。何かあったのだろうか。

チャイムの音は鳴りやまない。雪の降る静かな夜では、チャイムの音は風呂場どころかアパート中に響いているような気がした。

近所迷惑だろうか。やはり出た方がいいかもしれない。

山里は渋々浴槽から出て服を着、玄関へ向かった。

”ピンポーン、ピンポンピンポーン”

チャイムは鳴り止まない。少し苛立っているような押し方にも聞こえた。

少し焦りながらドアの前まで行き、ドアスコープを覗いた。

そこには、真っ暗な闇が広がっていた。

なんだよ、イタズラか。

そう思い、湯冷めしないうちに風呂へ向かおうとする。すると、

”ピンポーン”

また、チャイムが鳴った。

山里は、立ち止まり少し考えてから、イタズラだろうと結論して風呂に向かおうとした。すると、

”ドンドン、ドンドン”

今度はチャイムではなく直接ドアを手で叩く音が聞こえた。

たちの悪いイタズラだ、と思った。そして、一言文句を言いに行こうと再び玄関に向かったそうだった。

しかし、彼が玄関に到着すると同時に音は止んだ。まるで外から玄関の様子が見えているようなほど絶妙なタイミングだったという。

ガチャリとドアのチェーンを外し、犯人が逃げないうちに素早く開ける。いい加減にしろ、そういうつもりだった。しかし、その意気込みは肩すかしを食らい行き場を無くした。

玄関の前には、誰もいなかったのだ。

見も知らぬ人に馬鹿にされたように思い憤慨した山里は、苛立たままドアを乱暴に閉めて玄関に背を向けた。

彼が風呂に入りなおし、再度湯船に浸かろうと思ったときである。

今思えば、あれの気配を初めて感じたのはその時だったそうだった。

湯船で足を伸ばしているとき、肩に長く茶色い毛が乗っていることに気がついた。細く長い巻き毛である。山里は短髪で金色の髪に染めていたので、彼の髪ではなかった。

誰かの髪の毛がくつついてきたのだろう。そう思い、特に気にせず無造作に髪を排水口に捨てた。

しばらくの時間が過ぎてからのことである。山里は、ちらと壁に掛けてある鏡を覗いた。当然、そこには自分の姿が写っている。しかし、鏡に写っている自分に妙な違和感を覚えた。

手であつた。

手が、妙なところに写っている。

それは右肩にあつた。

右肩に、誰かに肩を叩かれた時のように手が乗っている。

…何かの見間違いではないか…？

鏡から視線を外し、自分の目の前にある手の数を数える。

いち、

にい、

「……………さん。」

耳元で、ぞわりと産毛を撫でるような女の声がした。

きいん、と耳鳴りがした。

全身は硬直し、動くことを忘れたように固まったままだである。

どくどくと波打つ潮騒。

それは自身の鼓動で、徐々に速度を速めていく。

「…の、ぞ……………さん…」

後ろから聞こえる声は掠れ、ごぼごぼと痰が絡まったような音だった。

何だ。

誰だ？

……”望さん”？

そう、聞こえたような気がする。

「ど……………して、ええええええエエエ……………」

風呂場に生ぬるく響く声は、男とも女ともつかないほど濁っていた。  
水の染み込んだ砂の城が崩れる寸前のような、臃気な声だったとい  
う。

山里の理性は、崩壊しかけた。

怖い。

何なんだ

……やめてくれ！！

しかし、彼の願いは霧散する。

ぴちゃん、と水滴が天井から落ちる音がした。

ぴちゃん。

…ぴちゃん。

その音と共鳴するように、じわじわと、背中に気持ち悪い感触が広がったのだ。

油の染み込んだ布が密着しているような感触。

硬直状態が続いている二つの腕の下に、ぬらぬらと黒く光る藻のようなものが流れてきた。

それは、若い女性のものであろう茶髪の巻き毛だった。

温かいはずの湯船のなか、彼は背筋に氷をあてたような寒さを覚える。

髪の毛は、山里の後ろから流れてきた。

”ピン、ポーン”

チャイムが鳴った。その時の玄関から聞こえるチャイムの音が、な

ぜだろうか救いの音に聞こえた。

山里はぶつんと何かが弾けたように、猛烈な勢いでバスルームから転がり出た。

”ピンポン、ピンポン”

チャイムは鳴り続けている。

彼は玄関へと走った。

頼む。

誰でもいい。

助けてくれ！！

そして、ドアを開けるとそこには見知らぬ中年男性が立っていた。

「夜分遅くにすみません。警察の者です。」

そう言つて男は警察手帳を見せた。

「…け、けいさつ…ですか…？」

「松本美智代さんの行方をご存じ無いでしょうか。」

「まつもと…？」

「先月から、行方がわからないということで失踪届が出されたので

す。…この写真の人なのですが。」

警察と名乗る男が取り出した写真には、見覚えのある女の顔があった。美人というほどではないが、右目下の黒子が似合う顔立ち。

「さ、さあ…。見たことはあると思いますが…行方は知りません…。」

嘘ではなかった。山里は、確かに松本美智代の行方は知らない。

ただ、山里は自分が松本美智代と会話した最後の人物であろうということは分かっていた。

「…そうですか。では、何かありましたらこちらまでご連絡下さい。」

そう言って男は、数字を羅列したメモ帳を破り渡して去っていった。

ばたん、とドアを閉め、はあとため息をついた。

正確に言うと、彼は松本美智代の行方を知っていた。  
いや、予測できた。

しかし、彼にはそれを警察に話せない理由があった。

…とにかく、美智代の事を警察に話すわけにはいかない。  
しかし、先ほどの風呂場での一件で、正直今すぐにでも外出したか

った。

…まず、服を着よう。そして近くのファミリーストランかネットカフェで一晩を過ごそうか…。

山里は、着替えの服を取りに部屋へ戻ろうと足を動かした。

「嘘を、つくのね…。」

一歩踏み出した時、耳元であの声がした。

耳元には、息づかいが聞こえるほど近くに何かがいた。

「…うそつき……………」。

怨みがましい声で、声は山里を罵った。

「……………ひと、殺し……………」。

山里は、ゆっくり、錆び付いた機械のようにぎしぎしと、後ろを振り向いた。すると、眼前には、眼球が有るべき場所を闇色に染めた女が立っていた。

右目の下に、黒子。

間違いなく、あれは松本美智代だった。

「みイ、つけ、たあア……………」

美智代はぐいつと唇を歪ませ、けたけたと甲高く笑った。

ねエ、あたしの目が無いわ。代わりに、貴方のその目え、頂戴……………  
耳元に響く声は、腐った果実のように甘い声だったという。

そこから先は、覚えていないという。気が付いたら、一人路上に倒れていたそうだ。

山里望は、殺人事件の重要参考人として取り調べを受けている。

「…それで。睡眠薬を飲ませた後君はどうした。」

「車で、山奥まで連れていきました。……………そして、置き去りにして家に戻ってきたんです。」

「その後は。」

「…知らないです。溪流のある崖の近くに置いておけば、目覚めた後に落ちるんじゃないかと思いました…。」

犯行の動機は、彼女のストーカー行為だという。

一年前に彼女と別れたのだが、その後も付き纏われ、引つ越しても追いかけて回され復縁を迫って来られた末の犯行だった。

警察が山里の家を訪ねてきたとき、すでに松本美智代は死後一週間以上は経過していた。

更に五日後、山里の自首と証言より彼女の遺体は発見された。

ひどい状態だったらしい。

山里の目論見通り松本は崖から転落。喉を尖った岩の先に刺さったことによる失血が原因の死だったそうだ。

落ちた衝撃で手足は複雑に骨折し、眼球が両目とも飛び出していた。驚くことに、現場には壁を上ろうとする彼女の爪痕が残っていたそうだ。

それが生きているうちのものは、山崎の話を聞いた後では恐ろしくて聞くことが出来なかった。

「あの日以来、夜も眠れなくて…。見てくるんです、美智代がこっちを…。眼球が無いのに目を向けて…。死んでまで、あいつは俺に付き纏うんです…。」

山崎は取り調べの最後にぽつりと呟いた。

取り調べが終わり、ガタン、と山里がパイプ椅子から離れた時。

茶色い巻き毛が、はらりと彼の肩から落ちた。

「美智代は、俺の後をずっと付いてきてるんです…」

憔悴しきった表情に無理な笑みを浮かべ、山里は髪の毛を見つめた。

何処で間違ったのだろう、それはさながら因果応報という言葉が二人を縛り付けている様に思えてならないのである。

つらんでおります（後書き）

ちょっと話が長くなりすぎましたね。

自分の中ではいまひとつな話です。

ホラーの部分とそうでない部分の采配に難しさを感じました。

それでも何とか書きあげられました。

ちなみに美智代さんは山崎さんに気に入られるようにモテカワを目指しておりました。しかし山崎くんは広末みたいな爽やかな子が好きでした。

悲しいすれ違いですね。

おにさんこちら

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

他愛ない遊戯だ。私は囃し立てる手の音を頼りに一步一步足を進めた。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

両手を前に突き出して腰を落とし、覚束ない足取りで次の鬼を探す。私の格好はさぞ滑稽だっただろう。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

囃し立てる声は止まない。手の音の合間に聞こえるのは、侮蔑の嘲りではないか。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

成程、私の姿はいかにも愚かに見えただろう。闇に戸惑い足が進まない。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

嘲笑が増してゆく。私が一挙一動する度にそれは大きくなる。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

単なる遊戯だったはずのそれは、私という鬼を標的にした差別的な

人間社会の縮図となっていた。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

このままでは、何時までたっても次の鬼が捕まらない。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

捕まえないでは。

次の鬼を。

このヒエラルキーの最下層から脱出しなくては。

早く私も人を見下したい。

早く。

はやく。

ハヤク。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

それが、私の生きていた頃の記憶の最後。

どうやら私は遊んでいた階段の踊り場から落ちたらしい。

現在私は手を叩いて鬼を呼んでいる。

今度は誰を鬼にしようか。

「鬼さんこちら、手の鳴るほうへ」

手の鳴るほうは、

こっちだよ。

おにさんこちら（後書き）

目隠し鬼は危険な場所で遊んではいけませんね。

怖いことが起きます。

ばす

夜、バスを待っている間に携帯小説を読んでいた。

ホラー小説であった。

ホラーものらしい背景で、黒い画面に悪趣味な装飾が施されていた。画面が黒くなったおかげで、光の反射で私の顔や後ろに並ぶ人の姿がよく見える。

私は携帯小説を読むよりそちらが気になって、髪型を直したり後ろのバスを待つ乗客の行動を盗み見たりした。

存外に見られていないと思うている人間の行動は面白いものである。私のように携帯電話をいじってくすぐすと笑っていたり、時計を確認して苛立っていたり、無防備な姿は滑稽に映っている。

画面の右下。そこにフードを被った男性が歩いてきた。

その男性は、パーカーの腹に付いているポケットからバタフライナイフを出していた。

ナイフの切っ先は鈍く銀色だった。

フードを被った男性はこちらに向かってくる。

足音はあまり響かず、砂を踏む音だけが濃厚だ。

男性は近づいてきた。徐々に、画面に写る顔の面積が広くなってきた。そのリズムは、砂を踏む足音と同調していた。

男性の顔が、携帯電話の画面の縦三分の一ほど写り込んだときに足

音は止んだ。

すると、私のすぐ後ろにいた男子高校生が、奇怪な悲鳴を上げた。先ほど携帯電話を弄って笑っていた少年である。

少年が倒れた時。フードの男性と、携帯の画面越しに目があった。男性はどろりと笑い、夜の闇に消えていった。

後ろを振り向くと、アスファルトに男子高校生が転がっている。

バスがやって来た。男子高校生以外の待ち人は、全員乗車した。

バスは、定時に発車した。

## ばす（後書き）

バスを待っている間の出来事でした。

主人公が妙に達観し過ぎている割にはケータイ小説を読んでいるというちょっぴり若者めいた一面も。

主人公は何者なのでしょう。

僕にも分かりません。

## くび

「宅配便です」

男はそう言つてそれを見せた。

それは男の手の上に生温かそうに乗っていた。

「判子かサインをお願いします」

ずい、と男の手から差し出されたそれは、私に託されることなく玄関に転がった。

「拇印でも結構ですよ」

にやりと男が笑う。一瞬、男と目があつた。

とつさにそれを拾い上げようかとしたが、勇気が無かつた。

どうしようかと戸惑っていると、男の手がずい、と紙を差し出す。

「判子か、サインをどうぞ」

男の口はそうとしか言わない。

仕方なしに、紙と一緒に差し出されたボールペンでサインを書き込んだ。

「では、これにて」

そう言つて男の首から下は、私の家を後にした。

玄關に残されたのは、私とそれ。

それは、その男の首だった。

男はにやりと笑つてこちらを見る。

また、目が合った。

## くび（後書き）

とある眠れぬ夜に思いついた話です。

こんな宅配便のお兄さんがいたら嫌だなあと 생각합니다。

## かじ

全焼した民家の焼け跡から裸の西洋人形が見つかった。

容易に見つかったのは、その人形が焼け跡一つ無い白い状態だったからだ。

わたしが火事後の処理でその人形を見つけた時、何だか薄気味悪くなりゴミ袋に乱暴に突っ込んだ。

人形は手足を妙な形に変形させ、顔にひびを入れて捨てられていた。

片づけが終わった夕方、帰宅しようと現場に背を向けた。

ばん！という音とともに顔に何かへばりついた。

もの凄い力を使って引き剥がしたのは、先ほどの人形だった。

耳元で、  
「捨てたな。」と声がした。

e  
n  
d  
.

## かじ（後書き）

人形を捨てる時は丁寧に。

## ちいちゃん

引越しの準備のため、押入れを整理していた。  
押入れの奥から出てきたのは、埃に塗れた赤ちゃんの人形だった。  
懐かしく思い作業を中断させる。

「ちいちゃん。」

私はその子に名づけた名前を知らず呟いた。

ちいちゃんのピンク色のほつぺたは黄色くなり、色白だった肌も煤けてしまった。

それでもきらきらした目と黒い睫毛は変わらない。

ちよんと突き出た口も愛らしい。

そつと頭を撫でると、痛みが激しかった為かぱらりと髪が抜け落ちた。

小さい頃は、何処へ行くにもこの子を連れて行ったものだ。

家族で温泉に行った時もこの子を連れて行った。

幼稚園に持っていこうとしてお母さんに叱られた事もあった。

一日に何回もキスをあげて着せ替えをして、髪を櫛削って綺麗にした。

本当の自分の子供の様な気さえした。

なのに、いつの間に忘れてしまったのだろう。

いつの間にこんな暗い所へ放ってしまったのだろう。

最後に遊んだのはいつだっただろうか。

あれは、小学5年生の夏。

あの公園だ。

公園でいつものように一緒に砂遊びをしていた。

その時は誰も遊んでくれる人がいなかったから、ひとりでちいちゃんとおままごとをしていた。

そうすると、近所の男の子が私を見つけにはやし立てに来た。赤ん坊を抱えたまま人形遊びを止めない私をからかったのだ。

年頃にさしかかる頃の私は、男の子にからかわれるのが酷く嫌で悲しかった。

悔しくて恥ずかしくなった私はその後、

ちいちゃんを、近くの川に捨てたのだ。

何故ちいちゃんは押し入れの中から出てきたのだろう。

はっとした私は再び手元の赤ちゃん人形を見る。

無表情のままじっと私を見ていたちいちゃんの手は酷く汚れていた。

ちいちゃん（後書き）

ちいちゃん、おかえりなさい。

かいだん

気がつけば教室にいた。教卓には髪の長い女子がいて黒板を消していた。

日直だ、と思い出した。

彼女と私は友達だった。日直の彼女を待っていたのだ。教室には私と彼女以外誰もいなかった。

「ねえ、帰ろう。」

彼女が黒板消しの粉をはたいてそう誘った。私は鞆を持って彼女と帰ることにした。

階段を下りる。螺旋状にぐるぐると降りていく。

七回目の踊り場に到着して気が付いた。これはおかしい、と。

隣の彼女を見るとにんまり笑っていた。

私は怖くなり、いきなり階段を駆け降りた。

すると彼女は足音も立てずに私の後をついてくる。

「逃げるの？」

私を階段から突き落とした彼女がそう言った。

目の前が真っ暗になった。

気がつけば教室にいた。教卓にはあの女がいて黒板を消していた。  
ああ、夢だ、と私は思い出した。

これは夢だ。夢のリピートなのだ。  
教室には私と彼女以外誰もいなかった。

「ねえ、帰ろう。」

彼女が黒板消しの粉をはたいてそう誘った。今度は、一緒に帰って  
はいけないと思って断った。

血走った目を見開いた彼女が足音も立てずに私の前に近づいた。

「逃げるの？」

私の首を絞めた彼女がそう言った。  
目の前が真っ暗になった。

気がつけば教室にいた。

e n d .

かいだん（後書き）

終わらない無限螺旋。

## よびりん

深夜一時に玄関の呼び出し音が聞こえた。

誰か火急の用事でもあるのかと思い玄関の扉を開けたが、誰もいなかった。

警戒心の強い庭の犬も吠えずに寝静まった夜の事だ。  
薄気味悪くなった私はすぐに扉を閉めた。

次の日、ベッドに入りまどろんでいた夜に呼び出し音が鳴った。

寝惚けた頭のまま玄関の扉を注意もせずを開けた。  
しかし誰もいない。

そうして昨夜の出来事を思い出す。

時計を確認すると深夜一時だった。

薄気味悪さが増え、何とも言えない気持ちのまま私はベッドに入った。

翌朝家族に聞いてみたが、チャイムの音がする時刻に起きていたのは私だけだった様で皆首を傾げていた。気味の悪さは募るばかりだった。

その夜から十二時には就寝する事で決着をつけた。しかしそう簡単に今までのサイクルを変える事も出来ず、私はただ枕に頭を押し付けるだけとなってしまった。

そのまま何もせず、布団の中で時が過ぎるのを待っていた。

ようやくまどろんできた時、部屋の時計を見ると深夜二時だった。

これで、今日はあの不可解な電子音に苛まれることなく眠れる。

私はそう思い安堵で心を軽くし目を閉じた。

しかし、チャイムは鳴った。

私の心情を見計らった様なタイミングで鳴ったのだ。しかも今夜は繰り返し繰り返し鳴らされている。

流石に慣れたのか、恐怖よりも怒りが先に立った私は玄関の扉を開けることにした。

音は鳴りやまない。

私は苛立ちと恐怖を半分ずつ抱きながら玄関の扉を開けた。

そこには誰もいない。

だがチャイムの音は鳴り続けている。

何なのだ。

もしかしたらチャイムが壊れていたのかもしれない。

扉の横にある呼び鈴を見たが、これと言って異常は無い。

きつと故障だ。

深夜の薄気味悪さに、あらぬ妄念を抱いてしまっただけなのだ。

私がそう納得すると、今まで煩かった音もぴたりと止んだ。

そうして更に翌日。専門の業者を呼んで直してもらう事にした。

丁度休日だったので、ここ数日安眠を妨害した原因を見届けようとした私は半ば興味本位で修理に立ち会った。

「何でしょうねえ、最近多いんですよ。」

修理に訪れた人が呼び鈴の四隅にあるネジを緩めて、機械を覆っているカバーを外した。

音を鳴らす装置の隙間には、人間の指が一本入っていた。

「何でしょうねえ、本当に最近多くて。」

業者がピンセットで取り出したその指は、うねうねと動いて指の腹を見せた。

e n d .

## よびりん（後書き）

これはホラーですか。僕にはギャグにしか見えません。

## のびた

彼とのデートは午後からだった。

志乃はその前に美容院へ行こうと思い、3か月伸ばした髪を躊躇なく切ってもらった。

志乃の髪は栗色に染まっていて、ショートカットでも似合う色だ、と一人でほくそ笑む。

化粧も直し、街のガラスに映る自分の服装も再確認をして、入念なチェックを終えた志乃は待ち合わせ場所に到着した。まだ彼は来ていない。

十分も待つと、彼がやってきた。

前のデートで志乃が見繕ったシャツを身につけてくれている。志乃は思わず眼尻を下げて遅刻を許そうとした。彼は私の髪型を気に入ってくれるだろうか。そんな期待も手伝ったのだ。

「あれ、志乃。髪……」

どうしたの？ととぼけるふりをして志乃が首を傾げようとしたが、彼の言葉に硬直する。

「髪、伸びた？」

一瞬彼が何を言っているのか分からなかったが、志乃はすぐに浮気を思った。他の女と間違えているのだろうか。そう思うと、俄かに嫉妬が沸き上がる。

「さっき切ったばかりよ。誰と間違えてるの？」

志乃は彼を睨みつけながらそう言った。彼は少し焦ったように言う。  
「え？だって、お前それ……」

彼が指差した志乃の右肩に目をやると、視界の隅には確かに栗色の髪があった。

「嘘。」

志乃が自らの頭に手をやると、美容院に入る前よりも多くの髪感触が志乃の頭を覆っていた事が分かる。

「何これ。」

髪を引っ張ってみるが取れない。地肌に張り付いているようだ。

「だって、さっき確かに切ったのよ。」

うるたえながら志乃はショーウィンドウに映る自分を探した。

ガラスに映っていた志乃は、確かにショートカットだった。

ガラスの中の自分は酷く満足そうな顔で笑っている。

せんたく

「ええ、洗濯機で脱水した服ってよくからまるでしょ。ズボンとか、長袖とか特に。あんな感じです。」

H氏は語った。

「川が増水すると、ほら、川の吹き溜まりっていうのかな。あるでしょう。何かくるくるしてるところ。こないだの大雨で民家のモノとか色々あふれ出して、そこで水と一緒になっってくるくる回るわけですよ。本当に洗濯機みたいですよ。何が見つかってたかって？そりゃ、もう色々です。紙の切れはしから家電から机から。そう、さつき言っただみたいに人間もね。」

H氏は自慢話を聞かせてやる、といった雰囲気できらぎらと目を開いて語った。

「洗濯機の服みたいに、髪も足も腕も首もみんな、骨なんかぼきぼきに折れてからまっちゃってね。部品がもげてる人もいたから、何人分絡まったか分かんなくて。その中にね、」

H氏はにやりと油臭く笑った。

「一年前に行方不明になった奴や、服と骨だけになった身元不明の遺体だとか、そういったのもいたんだよ。」

吹き溜まりって、何が溜まってるか分かんないよね。

H氏はそう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0417f/>

---

こわいはなし

2010年10月9日14時18分発行